

---

## 新潟県中越地震:ある看護師の小千谷での3日間 (小坂井保子、訪問看護と介護 10: 90-94, 2005)

2013年7月19日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

---

日本赤十字社医療センターに勤めている看護師、大和田恭子さんが2004年に起こった新潟県中越地震の災害支援活動で現地に行った時の報告である。

2004年10月23日午後5時56分、新潟県中越地方にマグニチュード6.8の大地震が発生。日赤医療センターの救護班は翌24日午前2時に第1班、25日午前9時に彼女ら第2班が出発した。小千谷小学校グラウンドに救護所を設置し、診療を開始すると同時に大勢の患者が訪れ、運び込まれた中には既に死亡している者もいたという。彼女は、そこでの救護活動を通して、高齢者に対する介護と精神病患者への対処が災害医療上の課題であると痛感した。

災害時によって非常時の生活を強いられることになるので、もともと介護を受けていた老人や傷病者は健常者以上に大きな危険にさらされることになる。高齢者では基礎疾患を有する人が多いため被災のストレスや疲れを受けやすく、家族は介護をする余裕がなくなる。被介護者は自分の介護が家族に負担にかけていることを気に病み、トイレを間遠にするため食事や水分の摂取を控えるなどするため脱水をきたすこともある。知的障害をもっている人で、震災後から体調不良、不穏がみられる、または認知症のある人が避難所に移ってから環境になじめずせん妄状態が出現し、夜間徘徊するため周囲の人々が眠れないという状況もみられた。

災害等によって非常の生活を余儀なくされると、被介護者と介護者というような危ういバランスは破壊されやすい。災害発生後すぐにデイケアやショートステイなどのサービスを開始できるような介護システムが作れないだろうか。また、地震災害救護というと震災の急性期においては外科医、避難所生活など慢性期では内科医の必要性はイメージしやすいが、心のケアに重点を置いた「精神科医」という発想は今までなかったように思う。今回の支援活動を通して精神科医の重要性を痛感した。

震災後、目まぐるしく変化する状況の中で大和田さんが学んだことは、まず現地の保健師と密接な連携をとることの大切さである。被災地の外から救護班として入る場合、現地の医療状況が全く分からないまま活動を開始しなければならないので、それらの情報を保健師からリアルタイムに得ることは非常に重要である。また当時、小千谷市内に日赤医療センター以外の救護班が数個班活動していたが、刻々と変化する被災地の状況の情報交換をするために毎晩合同のミーティングを開催した。24時間診療体制の中、皆が集まる時間を合わせるのは容易ではなかったが、この試みによって統合的な救護体制がとれたのではないかと思う。

そして、小千谷での救護活動で特徴的だったのが「地縁」の強さである。避難所において、健康を損ねている人に対する周囲のまなざしは温かく、隣近所の人々と相互に思いやり支えあっている関係が感じられた。今後の課題である災害後の介護システムもこうした地縁の中で展開されることが理想的ではないだろうか。